

ジェラルド・グリフィン

1 マラハイドの婚礼

アイルランドの伝説

I.

のどかなマラハイドに

喜びの鐘の音が鳴り響き

海辺には

さわやかな風が吹いている

花冠をつけた

5

乙女たちが集い

木陰で楽しそうに

ハープの弦が音楽を奏でる

II.

軽快な音楽を 響かせよ！

トランペットと太鼓を 鳴らせ！

10

喜び交わす挨拶の中

豪華に着飾った二人がやってくる！

教会の準備が整い

入口の扉が大きく開く

卿と婦人のお出まし

15

新郎新婦の入場である

III.

未来よ 花嫁の前に

末永く続く

この世の喜びを振りまけ

運命よ 門出に立つこの二人に

20

祝福に満ちた抱擁を

与えたまえ

あの黒くつややかな髪が

雪のように白くなるまで

IV.

高みにある祭壇の前

25

煌びやかに装った若い乙女が立つ

とぎれとぎれに

愛の誓いを立てる
父と母から
永遠に離れ 30
他でもない彼のために
自分の心を捧げると

V.
誓いが繰り返され
婚礼が終わる
儀式はすべて厳かに執り行われ 35
二人は今や一つとなった
心からの誠実なこの誓いは
命の尽きるその時まで
破られてはならない
との言葉が告げられる 40

VI.
静かに！ 賑やかな金属音が
二人の馬車まで聞こえてくる
怒りに満ちた大きな声が
入り混じって遠くからやってくる
敵が国境にいて 45
その武器の音が響き渡る
もはや隊列がばらばらになり
国境が破られたのだ

VII.
心良き羊飼いが
豹がうろつくのを谷に見つけ 50
注意深くも勇敢に
立ち上がる時のように
すでに新郎は
鎧を身につけ立ち上がり
一方 青ざめる新婦は 55
気絶せんばかり

VIII.
「男どもよ
いざ出陣だ
母や姉妹
そして 女 子供のため！ 60

丘を越え 谷を越え
山を越え 野原を抜け
立ち上がれ 男たる者よ 続け！
臆病者は相手にするな！」

IX.

行くぞ！ 出陣だ！ 65
男どもは隊列を作る
ぶつかり合う盾の音
ひしめき合う槍の輝き
すぐにでも すぐにでも 敵に
裏切りを後悔させてやろう 70
続け 市民よ 義勇兵よ
やるかやられるかの戦いだ！

X.

さみしいマラハイドに
夕暮れが訪れる
乙女たちは花嫁のために 75
鮮やかな花冠を編んでいる
花嫁はそれをぼーっと眺める
彼女の心は遠い彼方
自分のために血を流して戦っている
男たちを案じている 80

XI.

静かに！ 山のほうから聞こえてくる
勝利の叫びだ！
森を越え 泉を越え
叫びは天へとこだまする！
敵は退却した！ 85
やつらが岸へと逃げていく
侵略者の敗退で
戦は勝利に終わったのだ！

XII.

穏やかな面持ちで
勝者たちが帰ってくる 90
けれどもなぜ槍も太鼓も
布でくるんでいるのだろう？
彼らは盾の上高く

一体何を担いでいるのだろう？
あの戦の先立は 95
一体どこで道草を食っているのだろう？

XIII.

明け方に見た彼は
とても勇ましく陽気だった
婚礼の衣装を身に着け
その日主演となる男 100
さあ 恋人のために涙せよ
あっという間に勝利した瞬間
彼の希望は燃え尽きてしまった
頭領は亡くなったのだ！

XIV.

でも ああ あの乙女は 105
頭領を思い 悲しみに暮れる
重く沈む心は
ずたずたに引き裂かれる
彼女は明け方になると
草地にぐったりと崩れ落ちる 110
妻から未亡人となった女
乙女から花嫁となったのに

XV.

お前たち ここにいる乙女らよ
悔みを述べるのはよせ！
お前たちの慰めは 115
彼女の魂を深く引き裂いてしまう
これは真^{まこと}の話
長きにわたり誇りとされてきた話
彼は栄光のうちに亡くなった
だが ああ 彼が死んでしまったとは！ 120

XVI.

今でも彼女は哀しみを胸に
戦の鎧を掲げる
そして冷たくなった顔を
じっと見つめる
そのまなざしは永遠に 125
変わることはない

だが花婿は決して
再び戻ることはないのだ

XVII.

悲しきマラハイドに
吊いの鐘の音が鳴り響き 130
海辺には
死を悲しむ嘆きの声が響き渡る
重い心で皆々が
野原を後にする
太陽が昇り始め 135
空が白み始めたから

XVIII.

今なお あの谷では
何年もの月日がたつにもかかわらず
野生の柳の間を
海風がため息まじりに吹き抜けるとき 140
農民が 哀しげに
陰に立つ墓を見つめる
そこは ハッスィーが連れられるのを
朝日が目撃したところ

XIX.

こんなことになる予感など 145
ほとんどなかったのに
あの朝突然に
死の杯が満たされるとは！
その死の杯を飲み干した英雄は
暗がりの中で朽ち果て 150
モード・プランケットの霊が
彼の墓の上で咽び泣く

XX.

さびしい谷間を
さ迷い歩く者は
今でもため息をつく 155
この居た堪らない話に思いを馳せて
「こんなふうには地上で受ける
喜びの日々は過ぎ去るもの だから
こんなふうには 喜びはその音楽を奏でる

われら死するためにのみ生きるもの！」 160

(三木菜緒美訳)